

ガイアの嘆願と『イリアス』

城江良和

『イリアス』は、トロイア戦争伝説の中から、終戦間際の一局面を選び出し、ひとつの主題の下に構成したものである。戦争の発端については、「叙事詩の環」に属する『キュプリア』の範囲内であったが、『イリアス』でも、折りにふれて簡単な言及がある。本稿は、『イリアス』の詩人が、戦争の原因に関する伝承をどのように受け止め、作品の中に表現したかを探ろうとする試みである。

『キュプリア』によれば、ガイアは、増えすぎた人間の重みに耐えかね、しかも人間には神を畏敬する心がまったくなかったため、ゼウスにこの重荷を軽減してくれるようにと願い出た。ゼウスは同情して、まずテーバイ戦争を起こし、多数の人間を滅ぼした。続いて、雷と洪水で人類を全滅させようとしたが、モーモスに制止された。その代わり、この神の提案に従って、テティスを人間と結婚させ、ゼウス自身はネメシスと交わってヘレネを生み、トロイア戦争の原因を作った。この戦争でも多くの人間が殺され、それ以来、ガイアは重荷から解放された。ゼウスの計画が実現しつつあった⁽¹⁾。このように『キュプリア』においては、トロイア戦争の動因は、大勢の人間を抹殺しようとするゼウスの意図にあった。

ゼウスが人間の滅亡を図ったことは、ヘシオドスにも見える。『仕事と日』の伝える五種族神話において、銀の種族は、「非道の暴力を互いに抑えられず、また神々につかえることも、祭壇に供儀することも眼中になかった。そこでゼウスは、彼らが神々を崇敬せぬことに怒り、この種族を消した」(134-9)。さらに英雄の種族については、「禍いなる戦争と恐ろしい闘いが、彼らを滅ぼした。ある者はテーベの地で、オイディプスの家畜をめぐる争いに倒れ、ある者は髪美しきヘレネのため、トロイアへと船出し、海の大波を越えた後、命を落とした」(161-5)。また『エホイアイ』では、メネラオスとヘレネの結婚に続いて、ゼウスが半神の人間たちを多数滅ぼそうと企てた、

と語られる⁽²⁾。

『キュプリア』と共通する点は、第一に、銀の種族滅亡の原因として挙げられた、神に対する不敬である。『キュプリア』は、倫理性の顕著なことが特色のひとつで、この点で、ヘシオドスと共通の精神的背景をもっている⁽³⁾。第二の共通点は、英雄たちが、テーバイとトロイアの二度の大戦争によって滅びたという話である。

以上から、ゼウスが大戦争によって英雄たちを滅亡させたこと、そして、その動機は人間たちの不敬にあったことを語る伝承が、何らかの形で広く流布していたものと推定される。

『イリアス』においても、大勢の英雄が討死にし、そしてそれがゼウスの意向であるとたびたび語られるが、しかし、このことはトロイア戦争の原因として提示されるのではない。「アキレウスの怒りは、英雄たちの精強な魂を、数多く冥府に送り込んだ。……ゼウスの計画が実現しつつあった」(1.3-5, cf. 11.54-5), 「ゼウスは、いかにしてアキレウスに名誉を授けるか、多数のアカイア人を船べりで滅ぼすか、考えをめぐらせていた」(2.3-4), 「アカイア人が、アルゴスを遠く離れたこの地で、名もなく滅びるのが、至高なるゼウスの意向のようだ」(13.225-7, cf. 14.69-70). 「ゼウスは、大勢のアカイア人に、死が訪れることを望んでいたのだ」(19.273-4)⁽⁴⁾。

『イリアス』には、人間たちがおしなべて神への敬虔を欠き、それ故に神の怒りをかった、というような記述はない。トロイア戦争の原因として提示されるのは、パリスのヘレネ誘拐の話ばかりで、他には、一度パリスの審判が暗示されるだけである⁽⁵⁾。

それでは、英雄の滅亡が戦争のそもそもの目的であることや、その動機はゼウスに対するガイアの嘆願であること、そして嘆願の理由は人間たちの不敬にあること、これらのことは、『イリアス』以後に成立した伝承であって、『イリアス』の詩人はこれらを知らなかったと見なすべきだろうか。それとも、詩人はこれらの話を知ってはいたが、『イリアス』の内容とは直接関係ないもの、または相応しくないものと考えて、作品の中ではそれについて触れなかったのだろうか。私は以下において、『イリアス』の詩人はこれらの話を知っており、それらは『イリアス』の内容に反映されていることを示そ

うと思う。

『イリアス』は、トロイア戦争終結間際の短い時日に焦点を合わせ、その間の経過を語るものだが、その内容は、戦争の発端からトロイア陥落に至るまでの重要な事件を映し出し、戦争全体の縮図のごとき構成をもっている。次の四つの出来事は、いずれも『イリアス』内部で起こることであるが、その詩的意味合いは『イリアス』の枠を越えて、トロイア戦争の全景を『イリアス』の中に取り込む働きをもつ⁽⁶⁾。

I. アガ멤ノン⁽⁷⁾は、娘クリュセイスの返還を求める神官の嘆願をはねつけ、間接的にアポロン神を侮辱した。その結果、神の放った疫病によって多数のアカイア将兵が倒れ、結局、娘は父のもとに返還される。このことは、パリスがヘレネを誘拐した後、さらにアカイア側の返還要求をも拒否して、ゼウス・クセニオスの法を侵犯したこと、その結果、トロイアを破滅へと導き、結局、ヘレネは奪還されたことを反映する⁽⁷⁾。

II. パリスとメネラオスの一騎討ち（3歌）は、戦争の発端がこの二人の個人的な争いにあったことに対応する。『イリアス』の枠内では、この時点ではまだ両軍の戦闘は行なわれていないから、この対決が戦闘開始のきっかけになる。

さらにこの後、決闘に敗れかけたパリスは、アプロディテに助けられて城内に連れ去られ、女神のはからいでヘレネと同衾する。これは、パリスがアプロディテの援助を受けて、ヘレネを略奪し、帰路、クラナエ島で初めて結ばれた場面（cf. 3.445）を、時と場所を変えて再現したものである。

III. パンダロスは、ゼウスの名の下に取り交わした休戦の誓約を破って、メネラオスに矢を射かけ、誓約の神ゼウスの法を犯した。このことは、パリスが逗留先のメネラオスのもとから、ヘレネと財宝を略奪し、ゼウス・クセニオスの法を犯したことを反映する。

IV. 『イリアス』では、ヘクトルはトロイアのただひとりの守り手であり、彼が討死にすることは、あたかもトロイアの落城そのものを表わすかのように語られている⁽⁸⁾。詩人は、『イリアス』の時間的な枠の外にあるトロイア陥落を、ヘクトルの死の中に映し出す。さらに、彼の死を知った両親や妻の絶望と悲嘆には、陥落後のトロイアの人々を待ち受けている暗い運命が予

示されている。『イリアス』内では、ヘクトルの死をもって戦闘は終わるから、『イリアス』はトロイア戦争の終結をも、取り込んでいるのである。

以上のように、『イリアス』における戦闘の始まりと終わりが、戦争全体の発端と終結に対応する。特に、戦争の直接の原因となったヘレネ誘拐については、『イリアス』内の三つの出来事によって、異なった角度からとらえられ、再現されている。

トロイア戦争の全体像が、『イリアス』の中にはめ込まれている、そのような構図において、ガイアの嘆願をとらえることができるだろうか。『イリアス』と『キュプリア』の双方に現われる「ゼウスの計画」を手がかりに考えよう。

『イリアス』において、「ゼウスの計画」(1.5)とは、テティスの嘆願を聞き入れて、アキレウスの誉れを高めるべく、アカイア軍を敗退させ、多数の将兵を死に至らしめることである。そして嘆願の動機は、アガ멤ノンのアキレウスに対する不正であった。「ゼウスがトロイア勢を援護し、一方アカイア勢は、海岸の船ぎわに押し込んで、殺戮されるにまかせますよう。誰もが、かの王の何たるかを知るために。そしてアトレウスの子、広く統べるアガ멤ノンが、アカイア軍随一の勇者に何ら報いることがなかった、その我が身の愚かさを悟るために」(1.408-12)とアキレウスは、テティスに願い出る。これを受けて、テティスはゼウスに、「あの子に報いてやれるのは、ゼウス様だけです。アカイア勢が私の息子の償いをし、その誉れを高めるまで、トロイア勢に力をお与え下さい」(508-10)と嘆願する。ゼウスはその実現を、厳粛な身振りで約束する(524-30)。ゼウスがこの約束を実行し、大勢のアカイア将兵を殺害せしめたことは、既に見た通りである。

ゼウスが計画を実行するため、思案をめぐらせた後、まず行なったことは、アガ멤ノンに凶夢を送って、今こそトロイアを攻略できるだろうと告げて欺き、戦闘開始を促したことである(2歌)。だから、「ゼウスの計画」は、『イリアス』内の戦闘を始める動因になっている。

一方『キュプリア』には、「ゼウスの計画」は、詩の初めと終わりにあった。そのうち第一の「計画」(frag.1)は、ガイアの嘆願を聞き入れて、地上に増えすぎた人間の数を減らそうとしたこと、そのための手段として二大

戦争を起こしたことを指す。そして嘆願の動機は、人間たちに敬虔の欠けていることであつた。

第二の「計画」は、「アキレウスをヘラス軍の戦列から離脱させて、トロイア勢の重荷を解く」（プロクロス『梗概』）ことである。これは『イリアス』の「計画」と同じ内容を指し、明らかに、『イリアス』への続き具合を良くするための準備工作である。「重荷を解く」という動詞が不自然な使われ方をしているが、これは、『キュプリア』の第一の「計画」でガイアについて言われた事を、『イリアス』の「計画」に無理に関連付けようとしたためであろう。

『キュプリア』が戦争の動因として語る第一の「計画」と、『イリアス』での戦闘の動因である「計画」との相似は明白である。『キュプリア』の成立が、『イリアス』よりも後代であることは、『キュプリア』の第二の「計画」が『イリアス』を前提にしていることや、他のいくつかの証拠から推して、ほぼ間違いない⁽⁹⁾。したがって、相似の理由は二つ考えられる。すなわち、『キュプリア』が『イリアス』の内容を受けて、類似の構造をもつ「計画」を創作したか、または、『イリアス』以前に、ガイアの嘆願を戦争の動因とする伝承が、『キュプリア』とは別に、何らかの形ですでに成立しており、『イリアス』の詩人は、それを念頭においてテティスの嘆願の話を創作したか、どちらかである。

だが、『イリアス』の戦闘が、トロイア戦争全体の縮図になっているという構成を考慮するなら、後者がより妥当な解釈であろう。つまり、『イリアス』の詩人は、ヘレネ略奪やトロイア陥落を、それと同じ意義をもつ別の事件に置き換えて、『イリアス』の時間的枠内に取り込んだのと同様に、ガイアの嘆願をも、新たな形で詩の中に再現したのである。

ただし、ガイアの嘆願の場合には、他の場合と比べて、明らかな違いがある。他の場合、縮図の原型にあたる出来事、すなわち、パリスがアプロディテの手引きでヘレネを誘拐したことや、トロイアがやがて落城するであろうことは、『イリアス』の中で何度も言及される。ところが、ガイアの嘆願については、『イリアス』はひと言も触れていない。そのため、前者の解釈が至当と考えられたのも、無理からぬことであつた⁽¹⁰⁾。だが、英雄叙事詩と

しての『イリアス』の性格を考慮するなら、ガイアについて言及しなかったのは、むしろ当然の結果なのである。

『イリアス』では、トロイア遠征の目的は、メネラオスがパリシに報復することによって己れの名譽を守ることにあると、再三表明される。言い争いの最中、アキレウスはアガ멤ノンに向かって、「我々は、おまえとメネラオスのため、トロイア人に償いをさせようと、ここまでついて来たのだ」(1.158-60)と言うし、メネラオス自身も、パトロクロスが「おれの名譽のために、ここに倒れている」(17.92)のを知っている。だから、彼は戦場で「パリシを見つけると喜んだ。悪人に復讐しようと思ったからだ」(3.27-8)。これらの言葉は、戦争の動因を、英雄の名譽という人間的次元でとらえている。問題になるのは、人と人との関係である。

加えて、テティスの嘆願の目的は、辱められたアキレウスの英雄としての名譽を回復することにある⁽¹¹⁾。だから、『イリアス』の「ゼウスの計画」は、『キュプリア』のそれとは違って、人間どうしの問題を解決するための方策なのだ。

『イリアス』には、オリュンポスの神々の頻繁な登場にもかかわらず、人間を重視する姿勢がある⁽¹²⁾。トロイア攻略の手柄を、アキレウスに帰したのも、その表われである⁽¹³⁾。アテナの教示による木馬の計略が、落城の決め手になったとする伝統的筋書きに対抗して、トロイアの守り手ヘクトルを、武勇によって倒したアキレウスこそ、トロイア攻略者の名に相応しい英雄であると、詩人は主張する。そのために、『イリアス』は木馬の計略について直接言及できず、ただそれを暗示しているらしい文句があるのみである⁽¹⁴⁾。

『イリアス』は、その時間的枠外にあるはずのトロイア落城を、アキレウスによるヘクトルの死の中に映し出したのだが、それは同時に、攻略の功績を、神の手から人間の手に移すことでもあった。

同様に、ガイアの役割をテティスの行動に反映させることによって、戦争の発端を『イリアス』の中に取り込んだとき、戦争の動因を、ガイアの嘆願という神的次元から、英雄の名譽という人間的次元に移そうとしたのである。

『イリアス』が、真に英雄叙事詩であるために、ガイアの行動を持ち出せなかった、もうひとつの理由がある。ガイアの嘆願は、当時の人間の誰もが、

神への畏敬を忘れた悪党であったことを前提とする。しかしこの前提は、英雄の誉れの称賛を本分とする詩の性格とは、相容れない。人間が己れの非行の故に滅びるのは、『オデュッセイア』のような、正義の実現を説く物語には相応しくても、『イリアス』のような、人間の栄光と悲慘を歌う詩には相応しくない。『イリアス』では、アガ멤ノンやパリスをも含めて、すべての英雄は、神を畏れ敬い、神への務めを怠らない。にもかかわらず、容赦なく冥府に送り込まれねばならないところに、『イリアス』の厳しさがあるのだ。

最後に、大地の苦痛に端を発する人類抹殺の試みが『キュプリア』の独創ではないことを、別の角度から示すために、その話の原拠であるかもしれないひとつの文学作品をあげておきたい。ブルケルトは『イリアス』の中のいくつかのエピソードを、オリエントの神話に起源をもつものと推定しているが、同時に『キュプリア』とアッカドの叙事詩『アトラ・ハシース』との関連にも注目している⁽¹⁵⁾。これは、最高の賢者を意味するアトラ・ハシースの功績をたて糸にして、人類創造神話や洪水伝説を織り込んだ物語である。

それによれば、神々はかつて重い労働を強いられていたが、その苦しみに耐えかね、労働を肩代わりさせるために人間を創造した。ところが、やがて人間が増えすぎて、「大地は雄牛のように吠えた」。彼らの喧噪は神々の平穏を乱し、神エンリルは眠ることすらできなくなった。そこでエンリルは、疫病をはやらせて人間を抹殺しようとしたが、神エアの教えを受けたアトラ・ハシースの指示によって、疫病は止んだ。するとエンリルは、今度は、雨を降らせず穀物を枯死させて、人類を飢餓によって滅ぼそうとしたが、またしてもアトラ・ハシースのおかげで、人類は危機を免れた。しかしエンリルはなおも、大洪水をおこして人類の全滅をはかった⁽¹⁶⁾。

このアッカドの叙事詩では、大地は十分に人格化されておらず、したがって、ギリシアの叙事詩に見られるような神への嘆願は欠けているけれども、人間の過剰が大地を苦しめたこと、風を司る主神が洪水を含むいくつかの手段によって人類の滅亡を企てたことは、『キュプリア』に通じる。ブルケルトは、これ以外にも、『イリアス』1歌でテティスがゼウスへの嘆願にさいして言及する、神々のゼウスへの反乱の話についても、『アトラ・ハシー

ス』での、重労働を不服とする神々のエンリルへの反乱との類似を示唆している⁽¹⁷⁾。『アトラ・ハシース』からギリシア叙事詩への影響と見なし得る二つの個所が、ガイアの嘆願とテティスの嘆願という、私が以上においてそれらの成立上の密接な関係を論じた二つの話と関連して現われることは、注目に値する。『イリアス』の詩人が、人間の過剰と大地の嘆願の物語を承知していたことは、このことから裏付けられよう。

注

- (1) T.W.Allen, *Homeri Opera* V, Oxford 1974, frag.1, 7.
- (2) R.Merkelbach, M.L.West, *Hesiodi Fragmenta Selecta*, Oxford 1981, frag.204.96-100.
- (3) 松平千秋, 「叙事詩『キュプリア』考」 (『ホメロスとヘロドトス』1985 所収) は、ネメシスが原始的性格を捨てて、人間の不正を懲罰する女神へと変容する歴史的過程において、ヘシオドスから『キュプリア』への影響があったことを指摘している。
- (4) 他に, 8.467-8, 472, 9.244-6, 13.347-50.

大洪水によって人類を滅ぼす計画もあったことが、『キュプリア』に見える。洪水伝説については、デウカリオンとピュラの物語が Pind. 01.9.41-53 にある。『イリアス』の詩人が、洪水伝説を知っていたかどうか断定できないが、スカマンドロス河が氾濫してアキレウスに襲いかかる場面(21歌)は、洪水による人類滅亡の物語を反映しているのかも知れない。

- (5) ヘレネ誘拐については, 2.356, 3.87, 100, 157, 5.62, 6.328, 356, 7.374. パリスの審判は, 24.28-30.

Apollodoros, Ep.3.1 によれば, トロイア戦争の目的として, 英雄の滅亡のためという伝承と並んで, それとは別に, ゼウスが自分の娘ヘレネに名声を授けるためと伝えるものもあった。

- (6) 岡道男, 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』1988, 第1部第3章は, ヘレネの誘拐が, 『イリアス』の中にエピソードの形で反映していること, クリュセイスとブリセイスをめぐる事件が, 戦争全体の投射であること

を指摘し、そこに、詩人独特のもののとらえ方に根ざした叙事詩の技法を見る。

(7) 城江良和, 「王の罪 — クリュセス・エピソードが表わす『イリアス』の倫理観」, 『西洋古典論集』 IV, 1988, 19 頁を参照。

(8) 岡, 前掲書, 9-12 頁を参照。

(9) 岡, 前掲書, 460 頁を参照。

(10) 岡, 前掲書, 166 頁は, 『キュプリア』の二つの「ゼウスの計画」が, 密接に関連していることに注目して, 第一の「計画」もまた, 『イリアス』以後の伝承と見なす。

(11) 1.558, 2.3, 8.372, 15.77, 16.237.

(12) 『イリアス』では, 人間の行為にしばしば神が介入し, 人間にある行動を起こすように仕向ける。しかし, その場合でも, 神だけが原因で, 人間は神のあやつり人形にすぎないのではなく, 人間の行動は, 人間的次元においても十分に動機付けられている。

(13) 岡, 前掲書, 第1部第1章を参照。

(14) 15.71, 21.447.

(15) Walter Burkert, *Oriental Myth and Literature in the Iliad*, in: *The Greek Renaissance of the Eighth Century B.C.: Tradition and Innovation*, ed. Robin Hägg, Stockholm 1983, pp.53, 55.

(16) 「アトラ・ハシース物語」杉勇訳, 『古代オリエント集』(筑摩世界文学大系1) 1978, pp.167-90.

(17) Burkert, *op.cit.*, p.54.